

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 (教育学)	氏名	李 晨昕
学位授与の要件	学位規則第4条第1項・2項該当		
論 文 題 目			
中国人日本語学習者の「誘い」に関する語用論的研究—言語使用と産出過程に注目して—			
論文審査担当者			
主 査 教授 畑佐 由紀子			
審査委員 教授 白川 博之			
審査委員 教授 永田 良太			
審査委員 教授 仁科 陽江			
〔論文審査の要旨〕			
<p>「誘い」は日常会話では頻繁に行われている発話行為であり、適切に遂行することは重要である。本論文では、以下の研究課題を設け、日本語学習者の「誘い」の遂行における言語使用の特徴について、日本語母語話者や中国語母語話者と比較しながら検討し、日本語母語話者と言語使用が異なる原因を明らかにすることを目的とした。</p> <p>課題 1：日本語学習者の誘いの談話展開には、負担度別でどのような特徴が見られるか。また日本語母語話者や中国語母語話者とどのような相違点と共通点が見られるか。</p> <p>課題 2：日本語学習者の誘い談話におけるストラテジーの使用には、負担度別でどのような特徴が見られるか。日本語母語話者や中国語母語話者とどのような相違点と共通点が見られるか。</p> <p>課題 3：日本語学習者の誘い表現の使用には、負担度別でどのような特徴が見られるか。日本語母語話者や中国語母語話者とどのような相違点と共通点が見られるか。</p> <p>課題 4：学習者の誘いの遂行が日本語母語話者と異なる原因は何か。</p> <p>本論文は、全 7 章で構成されている。</p> <p>第 1 章では、日本語学習者の誘いの遂行における問題の所在と本研究の目的を述べた。</p> <p>第 2 章では、まず発話行為理論と第二言語学習者の発話行為の研究を紹介した。次に、日本語の「誘い」に関する研究を概観した。そして、学習者の発話行為の産出の認知過程に関する先行研究をまとめ、先行研究の知見と残された課題、及び本研究の課題を提示した。</p> <p>第 3 章では、学習者の誘いの談話構造の特徴を、先行部、主要部、終結部に分けて分析した。その結果、日本語学習者の先行話段の使用は日本語母語話者より少なく、中国語母語話者に似た傾向が見られた。また、日本語学習者は日本語母語話者より負担度が低い場合でも「再誘い」の話段が多いこと、そして終結部では「情報提供」話段の使用が多いこ</p>			

とがわかった。

第4章では、学習者の誘い行為におけるストラテジー使用を分析した。その結果、学習者が「誘い」の話段において多用する切り出しのストラテジーは、日本語母語話者と異なっていた。また学習者は「共同行為要求」や「情報提供」などの誘いストラテジーを使うことはあったが、日本語母語話者に比べて使用頻度が少なく、使用する箇所も異なっていることがわかった。

第5章では、学習者の誘い表現の特徴を表現形式の選択と語彙的調整の仕方に焦点を当てて分析した。その結果、表現形式については、日本語母語話者も学習者も「相手の意向を直接尋ねる型」を使用する傾向が見られたが、母語話者に比べ学習者はその使用頻度が低かった。また、語彙的調整については、母語話者が様々な調整を行うのに対し、日本語学習者は全体的に語彙的調整をしない傾向が見られ、「ちょっと」などの一部の語彙のみを多用する傾向が見られた。

第6章では、刺激再生法を用い、学習者の「誘い」遂行中の認知活動について分析した。その結果、学習者が「誘い」行為の遂行中に行う認知活動は、「文法や語彙への意識」「友人関係への意識」「発話の計画」「相手の反応への予測」「言語能力の不足に対する意識」「母語話者の助けへの意識」「間違っただけへの意識」という7種類に分類されることがわかった。中でも、「友人関係への意識」、「発話の計画」、「相手の反応への予測」は頻繁に使われていた。また、「中国語の社会語用論的知識の使用」「日本語の言語知識の不適切な使用」「日本語の語用言語学的知識の欠如」「教科書の影響」など学習者の語用論的知識や学習体験が発話遂行に影響していた。

第7章では、各章の結果を総合的に分析し、日本語学習者の誘い遂行の特徴について考察した。まず学習者は先行話段の使用が少ないこと、負担度が低い場合でも「再誘い」話段が多いこと、そして終結部では「情報提供」話段の使用が多いことから、上級になっても学習者の談話展開パターンは日本語母語話者とは異なることがわかった。また、学習者は多様な誘いストラテジーや誘いの表現形式を使うことができるが、日本語母語話者に比べて使用頻度が少なく、使用する箇所も異なっていることから、学習者は多様なストラテジーを使いこなすための言語知識は持っているものの、状況に合わせてストラテジーを適切に使いこなすことは困難であると考えられる。最後に学習者の誘いの遂行には、遂行中の認知活動や語用論的知識などが影響すると言える。

本論文は、これまであまり研究が進んでいない日本語学習者の「誘い」の発話行為を対象とし、中国語を母語とする学習者がどのように「誘い」を行うかを解明した意欲的な研究である。また、本論文では、談話構造、ストラテジー使用、言語表現、そして、言語使用における認知的判断という多角的側面からの解明を試みることで、これまで局所的な観察、しかも産出のみの分析に偏っていた発話行為研究に新たな学術的知見をもたらした。さらに、中国人学習者の「誘い」が日本語母語話者に好意的に受け止められない可能性とその原因を明らかにすることで、今後の指導における重要な示唆をもたらし、教育的にも意義深いと言える。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。